

## C. バーニーの『ヘンデル略伝』

# A Study of C. Burney's "Sketch of the Life of Handel"

今井 民子\*

Tamiko IMAI\*

### 要 旨

本稿では、イギリスの音楽史家C. バーニーによる『ヘンデル略伝』をとり上げ、その特質を明らかにした。本書はヘンデルの生誕100年、没後25年を記念する歴史的な大コンサートに関する報告書『ヘンデル記念演奏会報告』(1785)に含まれるヘンデルの略伝であり、著者のバーニーは、この歴史的なイベントの公的な記録者として国王より依頼を受けた。ヘンデルの伝記としては、彼のなくなった翌年、匿名で出版されたJ. マナリングによる『ヘンデル回想録』(1760)が最も早い。バーニーはマナリングの記述に依拠しつつ、ヘンデルの渡英前のハンブルク時代の活躍を新たに明らかにし、また、自身の若い頃のヘンデルとの交流体験をふまえて、巨匠の晩年の姿を浮き彫りにしている。

キーワード：G.F. ヘンデル, C. バーニー, 18世紀オペラ

### はじめに

本稿は、イギリスの音楽史家、C. バーニーによる『ヘンデル略伝』をとり上げ、その特質を明らかにする。本書はヘンデルの生誕100年、没後25年を記念する歴史的な大コンサートに関する報告書『ヘンデル記念演奏会報告』(1785)に含まれるヘンデルの伝記である。著者のバーニーは、この歴史的イベントの公的な記録者として国王から依頼を受けこの報告書を作成、全体はヘンデルの略伝と全作品目録、及び5日間のコンサートの詳細な報告から構成される。ヘンデルの伝記としては、彼のなくなった翌年出版されたJ. マナリングによる『ヘンデル回想録』(1760)が最も早い、バーニーがマナリングの記述に依拠しつつ、どのようなヘンデル像を描いたかを検証したい。

### I. ロンドンデビューまで

バーニーは、ヘンデルの伝記を書くにあたり、伝記作者は偉人の絶頂期の陰で見過しやすい初期の才能の芽ばえに注目すべしと、ヘンデルの渡英前の生涯を重視する(C. Burney, 1785, P. 1)。ヘンデルの死の翌年、1760年に出版されたマナリングによる『ヘンデル伝』について、バーニーは所在地や作曲年代に正確さを欠き、イギリスデビ

ュー前の初期の活動の記述に難点ありとする(同, P. 2)。

1684年(実際は1685年)、2月24日、マグデブルク公国のハレに生まれたヘンデルは、幼い頃から音楽への強い情熱を示したが、老齢の医師の父親は法律家になることを望む。しかし、ヘンデルの音楽への強い熱意と非凡な才能を認めた父親は、7才の時にハレの聖堂オルガニスト、ツァッホウに音楽を学ばせる。1698年、14才の時、オペラの盛んなベルリンの宮廷を訪れ、イタリア人歌手や作曲家ボノンチーニ、アッティロを目の当りにする(同, P. 3)。ヘンデルは選帝侯より宮廷音楽家の職とイタリア留学を奨められるが、この申し出を辞退しハレに戻る。まもなく父親がなくなったため、音楽で身を立てるべくオペラで有名なハンブルクに向かう(同, P. 4)。

ベルリンから帰郷し、1703年、19才でハンブルクに現れるまでの5年間のヘンデルの活動について、バーニーはマッテゾンの『登竜門への基礎』(1740)に基づき明らかにする。彼は、『登竜門への基礎』のテレマンの自伝の中の、ヘンデルに関するエピソードを手がかりとして紹介している。1681年、マグデブルク生まれのテレマンも、ヘンデル同様に早くから音楽の才能を示すが父親が亡

\* 弘前大学教育学部音楽教室  
Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

く、ライプチヒ大学で法律を学ぶ決心をする。しかし、ライプチヒに向かう途中、ハレに立寄りすでに名を知られたヘンデルと知り合い、音楽の魅力に再びとりつかれる(同、P.5)。ライプチヒでは、以前作曲した詩篇曲が好評を博し、市長より定期的な宗教曲の依頼を受け、その後音楽家として見事に自立を果たす。彼はこの頃ヘンデルとフーガのテーマをめぐる手紙をやりとりしたり直接会って意見を交わしたという(同、P.6)。しかし、遠隔のライプチヒとハンブルク間を2人が頻繁に往復した事実にはバーニーは疑問を呈している。

次に彼は、ヘンデルのドイツ時代の生涯は、マナリングの伝記よりもハンブルクで彼と同時期を過ごしたマッテゾン(註)の著作がはるかに有益であるとする(同、P.7)。マッテゾンは、1681年にハンブルクに生まれ、テレマンやヘンデルと同様に早くから音楽の才能を示し、作曲家、オペラ歌手、ハーブシコード奏者として活躍、その後、イギリスの外交官秘書となり、側ら音楽に関する膨大な数の著作を残した(同、P.8)。彼は1761年、マナリングの『ヘンデル伝』に注釈を加えて翻訳出版したが、「マッテゾンは決してすぐれた歌手ではなく、時々雇われて歌っていただけ」という件を「彼はハンブルクオペラで15年間常に首席歌手を勤めて大成功し、その喜怒哀楽の表現は聴衆を魅了した」と訂正している(P.補遺1)。彼の『登竜門への基礎』によると、マッテゾンは1703年の夏、聖マグダラのマリア聖堂のオルガン席でヘンデルと初めて出会い、彼に聖堂やオペラ、コンサートの職を紹介する。ヘンデルははじめオペラのオーケストラのヴァイオリン、リピエーノ奏者となり、またこの頃、長大なアリアやカンタータを作曲するが、和声はすぐれているも趣味に欠け、まもなくオペラと関わる中でこれを克服した(同、P.補遺2)。2人は親密な仲ながら大いに競い合い、ヘンデルはオルガン、マッテゾンはハーブシコードを得意とし、互いの領域は守ったという。

1704年、マッテゾンはオランダに行きオルガン演奏で好評を博し、ハーレムのオルガニストに推挙されるが、ヘンデルは手紙を書きマッテゾンに辞退させた(P.補遺3)。この頃ヘンデルは最初のオペラを書くが、主役にマッテゾンを想定して彼の歌唱スタイルと声域が考慮されている。マッテゾンはヘンデルから転調の知識や音の結合方法を学んだ。リュベックのオルガニストが空席となったとき2人は当地をめざし、途中の馬車の中で

二重フーガを頭の中で作曲、またヘンデルはオルガンの名演奏でリュベックの人々を驚かせるが、指定の女性を妻とする独得の条件に志願を断念する。この頃、音楽史上有名な2人の決闘事件が起こるが、事のてん末は以下の通りである(同、P.補遺5)。1704年、マッテゾンが作曲した《クレオパトラ》に彼はアントニー役で、ヘンデルはハーブシコード奏者として出演したが、早いうちに役を終えたマッテゾンとヘンデルの間でハーブシコードの演奏をめぐる争いが起こり、ついに劇場外の決闘に及ぶが、幸いマッテゾンの剣がヘンデルの上着のボタンに当たって事無きを得たという。マナリングがこの件について「決闘というより暗殺に近い」としたのは誤りで、ヘンデルは身体強健な20才の若者で自衛は可能だったと反論する。2人はすぐに和解し、ヘンデル最初のオペラ《アルミーラ》のリハーサルでマッテゾンは伴奏と主役歌手をつとめ、本番のオペラは大成功を収めた(同、P.補遺6)。

マッテゾンは趣味よりも学識にすぐれ、それを証明する自分の葬儀用のアンセムでは、「御座をとりまく虹」の歌詞に、アーチ型の旋律による対位法が書かれている。バーニーはマッテゾンの作品を着想に欠け面白くないとし、彼の得意とするハーブシコード曲もヘンデルにはとても及ばないとする(同、P.補遺7)。マッテゾンによると、ハンブルク時代のヘンデルは、オペラで自らのスタイルを大いに発展させ、またオルガンの即興演奏では当時著名なライプチヒのクーナウをしのぐ実力であった(同、P.補遺8)。ハンブルクオペラで資金を得たヘンデルは、念願のイタリア旅行に出発、フィレンツェではオペラ《ロドリゴ》、ヴェネツィアでは《アグリピナ》を作曲して大好評を博した。ローマではD.スカララッティ、ガスパリーニ、コレッリの音楽に接して啓発され、またセレナータ《時の勝利》を作曲、ナポリではイタリア語の《エーシスとガラテア》を書くが、これは後のシャンドス侯のためのゲイ作詩の英語のオラトリオとは全く異なる。1709年の後半か1710年の初めにはドイツに戻り、最初に立寄ったハノーヴァーの宮廷では選帝侯で後のイギリス国王、ジョージI世との運命的出会いをし、楽長で友人のステッファニーの推薦により宮廷楽師の契約をするが、イギリス進出の意欲もふくらんでいた(同、P.9)。

## II. イギリスのオペラ活動

1710年の後半、ヘンデルはイギリスにやってきましたが、当時、画期的な発展を見たウィット、詩、文学、科学に加えて、ヘンデルは神経質で学識ばった音楽をイギリスに導入し、生涯かけてこれを繁栄させた、とバーニーは評している（同、P. 9）。1711年、彼のデビュー作となるオペラ《リナルド》が上演されるが、台本は興業師のヒルがタッソーの《解放されたエルサレム》から構成し、イタリアの詩人、ロッシが完成したもので、ヘンデルは2週間で作曲したという（同、P. 10）。しかし、すぐれた批評家、アディソンの批評は取るに足らない催しの一つと扱う冷たいもので、彼がもし、文学同様に音楽にもすぐれた判断力と感情があれば、ヘンデルのこれほどすぐれたスタイルのオペラは風刺の対象とはならない、とバーニーは反論している。《リナルド》はすぐれたイタリア人歌手、ニコリーニ、ヴァレンティーニが出演し何年も人気を保ち再演された。

イギリスでの確固たる地位を築いた後、ヘンデルはハノーヴァーに一時帰国するが、まもなく渡英して1712、13年は《忠実な羊飼》《テ・セオ》、1715年には《アマディー》を上演している（同、P. 11）。また、ユトレヒトの講和を祝して書いた《テ・デウム》と《ユビラーテ》（いずれも1713）は、イギリス人がかつて聴いたことのない力強さと規則性、楽器の効果があり、パーセルの《テ・デウム》は着想と言葉の表現では卓越しているが、伴奏の壮大華麗さではヘンデルに軍配が上がる。アン女王からの年給200ポンドの申し出をはじめとする順調な状況の中で、ヘンデルは1714年、アン女王が死去し、ジョージI世が渡英するまで帰国を考えなかったようだ。ヘンデルは渡英以来、疎遠となっていたハノーヴァー選帝侯の信頼を回復すべく、キルマンセッジ男爵のはからいで、ジョージI世がイギリスにきてから興じた舟遊びの音楽を秘かに書いて舟中で指揮をとった（同、P. 12）。後に《水上の音楽》として知られるこの音楽が功を奏し、国王の勘気がとけ、年給は倍増され、またほどなくして200ポンドの報酬で王女たちの音楽教師も依頼される。

1715年から20年の間は、オペラ上演の記録はないが、はじめの3年は美術のすぐれたパトロンとして知られるバーリントン侯爵邸に滞在、あとの2年はキャノンのシャンドス公爵の楽長を務めた（同、P. 13）。ここでは毎日演奏される礼拝堂の

音楽、アンセムその他、オーボエ・コンチェルトの主要部分、ソナタ、練習曲集、オルガン・フーガが書かれ、それらはオペラ、オラトリオその他の声楽曲を除いても彼の名を不朽のものとしただろう。そして、いよいよヘンデルの生涯において、ダンテが「人生の歩み半ば」という最盛期が訪れる。彼はどんな困難ものともしない手と、作曲の無限の才能と非凡な能力をもって、音楽家の頂点に立ち、イギリスの君主、貴族、一般の人々の支持を獲得した。つまり、国王はじめ貴族たちが出資し、ヘンデルを音楽監督とするイタリアオペラの興業組織「ロイヤル・アカデミー」が確立される（同、P. 14）。

ヘンデルはキャノンを去り、歌手の獲得にドレスデンに行き、セネシーノらをイギリスに連れ帰った。しかし、イタリアオペラの作曲家、監督としてはすでにボノンチーニとアッティロが活躍していたため、ヘンデルを受け入れない人々もいて、スウィフトは、風刺詩で価値を認めない芸術家を批判した。しかし、この風刺家は、ドライデンと鐘鳴らしのふれ回り屋、あるいはラファエロとペンキ屋の区別がつかないのと同様に、ヘンデルやボノンチーニの作品と卑しいヴァイオリン弾きの音楽の区別がつかないのだ、とバーニーは批判する。芸術や宗教、道徳の愛好者は誰でも鋭い風刺の追求を逃れることはできない（同、P. 15）。裕福な人々の多いこの大国のロンドンでは、狩りや田舎のスポーツに代わり、無邪気な娯楽が求められ、才能や資金が音楽の奨励と支援につきこまれている。オペラはイタリアからフランスを経てイギリスに導入されたが、アン女王時代までイタリア語で上演されることはなく、はじめは英語とイタリア語がまじりあい、その愚劣さをアディソンはユーモアをこめて皮肉っている。イギリス貴族のオペラの愛好は、彼らの青春期のイタリア旅行と同様に熱狂的なものであり、彼らが見聞した模範にできるだけ近いものを見たいと思うのは当然である。

ロイヤル・アカデミーを支援する貴族たちの間では、しばしば激しい政治的、音楽的対立があった（同、P. 16）。ボノンチーニとアッティロを支持するものたちが、ヘンデルの擁護者たちへの憎しみを強める中、ヘンデルはハイマーケット劇場で1720年、《ラダミスト》を上演、大盛況を呈したが、敵方を完全に制圧するには至らなかった。1721年、ボノンチーニ、アッティロ、ヘンデルが各々

1幕づつ分担作曲した《ムツィオ・シェーヴォラ》が上演され、その評価はヘンデルが1位、ボノンチーニが2位というものだった(同, P. 17)。当時全ヨーロッパで著名なボノンチーニにヘンデルが打ち勝ったことは名誉なことであったが、両者の真価を見分けてどちらかに軍配を上げることのできる人々はほとんどいなかっただろう、とバーニーはいう。ボノンチーニのイタリア語の曲付けがすぐれているのは、イタリア人だけに判断できることで、彼らは、ボノンチーニの歌唱と言葉の知識が自然で優雅な旋律と、感情豊かなレチタティーヴォを生み出しているという。しかし、ヘンデルは壮大さ、力強さ、着想の点でボノンチーニにはるかにまさっており、ヨーロッパ中の人々を感動させるのだと結論している。

1721年から8、9年はロイヤル・アカデミーは最盛期を迎えたが、ボノンチーニ、アッティロのオペラはヘンデルのオペラと同じ歌手で上演され、また1727年には、当代の人気を二分するプリマドンナ、クツォーニとファウスティナが同じ舞台上で登場すると、各々をひいきにする聴衆たちの激しい争いが起こった(同, P. 18)。

彼女たちは全く持ち味を異にする歌手であったにもかかわらず、聴衆たちは対等に評価せず反目するばかりで、その後の興業師たちは、同性の有名歌手を同時に契約するという浪費を改めた(同, P. 19)。アーバスノット博士は、花形歌手にまつわるオペラ界の確執を評し、『セント・ジェームズ教会の大騒ぎ、つまり、ファウスティナ夫人とクツォーニ夫人の流血事件、ボスキ氏とパルメリーニ氏の闘い、セネシーノがオペラ界を去り、ヘンリーの小礼拝堂で詩編を歌うに至ったてん末』と題する風刺文を1728年発表した。その後、ヘンデルとセネシーノの間に不和が生じ、これはアカデミーの解散につながり、ヘンデルの音楽人生に大きな打撃を与えることになる。アーバスノット博士はヘンデルを擁護して『大騒ぎの和音、ヘイマーケットのオペラ劇場の監督ヘンデルに宛てた、ヘイマーケット劇場以外のすべてのイギリスの劇場の非凡な作曲家、ハーロスランボ・ジョンソンからの手紙』と題する別の風刺文を発表した(同, P. 20)。パンフレットの内容は、ヘンデルがイギリス国民に対して犯した罪で裁かれるというものである。その罪とは、第1に、彼が過去20年間イギリスの人々を魅了したこと、第2は我々イギリス人は悪い音楽を欲したのに彼は無礼にも良い音

楽と堅固な和声を提供したこと、第3に凶悪、尊大にも彼がイギリス人を楽しませる絶大な力を持ち、不機嫌でいても我々をうっとりさせること、としている。「画びょう博士」と「保守党员博士」(ペプシュとグリーンのこと)は、ヘンデルが大学を卒業しておらず、彼がユークリッド幾何学も古代ギリシャの音階論も知らないといふ非難する。

法廷の結論は、あるオペラが途方もない浪費と怠情と女々しさの源であるなら、これらの苦情に対して別のオペラを立ち上げる他に方法はない、という(同, P. 補遺19)。アーバスノットによる書簡体のパンフレットは、1733年2月に出版されるが、当時のオペラ界の情報を精査して集めたものである(同, P. 補遺22)。ここから、ヘンデルに対抗してリンカーズ・イン・フィールズ劇場に確立された新しいオペラの組織「貴族オペラ」の主要メンバーは、作曲家ポルポラ、アリゴニ(リュート奏者も兼ねる)、歌手セネシーノ、セガッティ、バス歌手モンターニャ、女性歌手チェステ、ベルトッリ、台本作者ロッリ、擁護者のペプシュ、グリーン、両博士とホルクーム氏であり、一方、ヘンデルのオペラ団はカレスティーニ、ストラダその他から組織されたことがわかる。

ヘンデルとセネシーノの争いは、双方の自己主張の強さから生じたもので、もしヘンデルの気性が彼の指のように柔軟であれば和解がもたらされたかもしれない。2人の確執は、ヘンデルのその後の失意と不幸の連続の一生に影響を与え、1729年のアカデミーの解散後のオペラはいずれも成功を収めることはなく、彼は健康と名声と富を一度に失った(同, P. 補遺23)。一方、セネシーノの歌唱は、声の高さとすばやさはないが、身ぶり、声、表現の威厳は、ファリネッリ、カッファレツリ、カレスティーニら彼の後継者たちよりはるかにまさっていた。セネシーノとの不和の後、ヘンデルが契約した歌手たちは、歌唱スタイルも新しく、声の早業の持主であったが、ヘンデルの好むものではなかった。セネシーノとの決別後のヘンデルのオペラで推奨できるものはほとんどない、というのは妥当でない。彼のアリアは一般に歌手の能力に応じて作曲され、後期のオペラのもの、わずかの例外を除いて声、趣味、表現のいずれも高い能力を求めている(同, P. 補遺24)。しかし、オーケストラは無限であり、歌手の声や才能の不足を伴奏の豊かさと創意で補っている。ファウスティナとセネシーノの歌う《シロエ》

(1728)の2つのアリアから、ヘンデルが他の誰よりも堅固さと創意をもち、彼の後継者たちが世紀半ばでようやく到達した趣味や洗練の域に彼は早い時期に達していたことを物語っている(同, P. 21)。

### Ⅲ. オラトリオの活動

アリアとレチタティーヴォで進行する本格的なオラトリオは1600年、ローマで初演されたカヴァリエーリの《魂と肉体の劇》に始まるが、音楽による奇跡劇にオラトリオのタイトルが最初に適用されるのは、1645年のF・バルドッチの作品である(同, P. 21)。ヘンデルがシャンドス公のために1720年に書いた《エステル》は、1731年、王室礼拝堂の聖歌隊により指導者のゲイツ邸で再演されたが、聖歌隊の合唱は舞台とオーケストラの間に位置し、楽器は主に「フィルハーモニック・ソサイエティ」のメンバーで演奏された(同, P. 22)。その後、《エステル》は、居酒屋の「クライン・アンド・アンカー」でも演奏され、1733年にはヘイマーケット劇場で上演されるに至る(同, P. 23)。同年、同劇場で《デボラ》も初演され、また、オラトリオの合間にヘンデルはオルガン協奏曲で聴衆を楽しませ、そこで彼はフーガの即興演奏、ディアペーソン音栓の使用、あるいはアダージオを導入して着想の豊かさと正確な演奏を披露した。1733年、ヘンデルはオクスフォード大学に行き、余興として、同行したオペラ団による《アタリア》を上演、また新しいオルガンの公開を目的に即興風の、あるいは周到なオルガンの演奏で人々を驚かせた。1734年のレントでは、オラトリオをコヴェント・ガーデンでも上演し、1735年には《アレクサンダーの饗宴》が初演された。1738年の《エジプトのイスラエル人》、1739年の《陽気の人、ふさぎの人、温和の人》の上演は、この時期劇場が閉鎖されたため困難を極めた(同, P. 24)。友人の助言でヘンデルは慈善演奏会を催し、1738年3月、ヘイマーケット劇場では、500人の上流の人々が舞台上の円形劇場風の座席に陣どり、多大の利益を上げた。

1740年に《サウル》がリンカーズ・イン・フィールズ劇場で初演されるが、これ以降、ヘンデルはオラトリオの作曲に専念する。相次ぐオペラ興業の失敗と重い病による失意の中で、彼は1741年、心機一転をめざして新しいオラトリオ《メサイア》のアイランド公演を試みる。当時、詩人

のポーブはヘンデルを評した有名な風刺詩を発表するが、それは擬人化したイタリアオペラが退屈の女神に、シェイクスピアの如くそびえ立ち、百本の腕で魂をかき乱す巨人ヘンデルを捕えてアイランドに追い払うよう嘆願するものである(同, P. 26)。バーニーの註では、彼がチェスターのパブリック・スクールの生徒時代、アイランドに向かうヘンデルが当地に立ち寄り、《メサイア》の試演を行った様子を報告している。ダブリンの《メサイア》上演は、町の監獄の慈善のために大好評を博し、とりわけ歌手のシバー夫人のアリアは自然の情緒と完璧な言葉の理解で人々の心を動かし、ヘンデルは1742年のはじめ、ロンドンに戻り、反目していたオペラの興業師と和解し、コヴェント・ガーデンでのオラトリオ上演を獲得する。同年上演の《サムソン》は《メサイア》を除く彼のオラトリオの中で最も人気があり、一方《メサイア》もますます評価され、慈善の資金集めに貢献した(同, P. 27)。

《メサイア》について、ヘンデルは捨子養育院の慈善のために毎年これを演奏することに決め、彼の存命中は彼自身の指揮で、没後はJ. C. スミス、スタンレイの指揮で行われ、1749年から77年までの収益金は1万ポンド以上に上った(同, P. 27)。しかし、《メサイア》と《サムソン》を除くオラトリオは概して入りが悪く、1745年、《ヘラクレス》の上演では、ヘンデルは出演者に給金を支払えない状況だったが、国王ジョージⅡ世は、ヘンデルの強力なパトロンとして熱心に足を運んだ(同, P. 29)。晩年、彼は視力の衰えに苦しむが、彼の知性に影響はなく、オラトリオの合間のオルガン協奏曲や即興曲の演奏では従来と変わらぬ精かんさを示した。彼は晩年も作曲を続け、《ユダス・マカベウム》(1746)のデュエットと合唱は、スミスが口述筆記したもので、最晩年の作品にもかかわらず、ジョンソン博士のいう、老いのため精神的な精気を失いながら、力強い知性と独創的な才気を保つ数少ない例といえる(同, P. 30)。

### Ⅳ. ヘンデルの臨終、人となりその他

ヘンデルは1759年、4月6日に最後のオラトリオの演奏を終え、4月13日、金曜日になくなったが、墓碑銘には誤って4月14日、土曜日と刻まれている(同, P. 31)。ヘンデルの臨終に立ち会ったワレン博士によると、彼は近づくと死を予感して信仰心を深め、なくなる何日か前から、復活した神に

会えるように聖金曜日に息を引き取りたいと願ったという。ヘンデルは大柄で幾分太っており、動きにくそうだったが、表情は活気と威厳と非凡さに満ちていた。彼の物腰は荒々しく、横柄だったが、意地の悪さは全くなく、実際、彼は怒りっぽいやい中にもユーモアを絶やさず、下手な英語を話す冗談好きな人物だった。彼の生来のユーモア好きは人々を楽しませ、もし彼がスウィフトのように英語に精通していれば、彼のような気のきいた文句を連発していただろう（同、P. 32）。1727年、ジョージⅡ世の戴冠式の際、ヘンデルの作曲したアンセム《私の心はうるわしい心であふれる》の歌詞は聖書から巧みに選択され、彼にすばらしい着想を吹き込み、すべての彼の作品に響いている（同、P. 34）。バーニーは、1740年代、ロンドンでの初の音楽修業の時期に晩年のヘンデルに出会い、ブルック・ストリート彼の自宅と、オラトリオのリハーサルをするカールトン・ハウスの他、シバー夫人や当時バーニーの女性の弟子であった

フラーシの家でヘンデルに間近に接し、彼の人となりと音楽に触れた（同、P. 35）。彼はヘンデルの業績を賛えて、彼の名をオルフェウスやアムピーオンその他の一群の楽聖たちの一人に加えている（同、P. 38）。彼の葬儀は、1759年、4月20日、彼がウエストミンスター・アビイに埋葬されるときに行われ、かつての反目や嫉妬は解消し、時の検証とともに彼の作品は新たな魅力を付与されている、とバーニーは伝記を結んでいる。

#### 参考文献

- C. Burney, Sketch of the Life of Handel, in An Account of the Musical Performances in Westminster-Abbey and the Pantheon in Commemoration of Handel, 1785, London, rep., Da capo Press Inc., New York, 1979
- J. Mainwaring, Memoirs of the Life of the Late George Frederic Handel, London, 1760, rep., Da capo Press Inc., New York, 1980

(2004. 7. 30受理)